

広域観光連携と狭域観光連携に関する考察*

—九州中央地域を事例として—

Consideration of Wide and Narrow Range of Sightseeing Cooperation*

— Case Study of Central Kyushu Areas —

甲斐 猛**・樗木 武***

By Takeshi KAI**, Takeshi CHISHAKI***

1. はじめに

地域連携の1つのあり方として、各市町村の観光資源を活かす観光連携が考えられるが、その中には魅力ある観光資源を持つ自治体と極めて局地的な観光資源を持つに過ぎない自治体がある。地域連携策としての観光連携を効果的に推進する立場からは、地域全体が連携意識を深め、共通認識に立つことが必要である。その意味では、観光客の流動実態に即した広域連携地域及び狭域連携地域の双方が共に連携のメリットを共有する必要がある。

本研究は、九州中央地域及び緑川流域で実施したスタンプラリーのデータをもとに観光資源の豊かな地域と乏しい地域を含めた広域的及び狭域的な観光連携における観光客の観光流動を把握し、観光施策のあり方を検討する。

2. 研究方法

広域観光連携として九州中央地域(図-1)を取り上げ、広域的な観光流動の実態を明らかにする。また、狭域観光連携として緑川流域を取り上げ、広域観光連携との相違点等を明らかにする。九州中央地域の分析方法は、スタンプラリーから得られたデータをもとに単純集計及びクロス集計により、広域観光の特徴を把握し、観光客の流動形態をパターン分類するために数量化理論第3類を適用する。また、観光供給地と観光需要地との関係を明らかにするために、観光流動のOD表を作成し、ファジー構造化モデルを用いて階層構造を作成し検討する。また、緑川流域は、九州中央地域と同様の方法を用いて分析を行う。最後に、広域観光連携と狭域観光連携の

*キーワードズ：観光、余暇活動

**正員、九州大学大学院工学研究科(福岡市東区箱崎6-10-1、TEL092-642-2208 FAX092-642-2209)

***正員、工博、九州大学大学院工学研究科

双方を考察することにより、それらのあり方について検討する。

3. 九州中央地域の広域観光連携

(1) 応募者の特徴

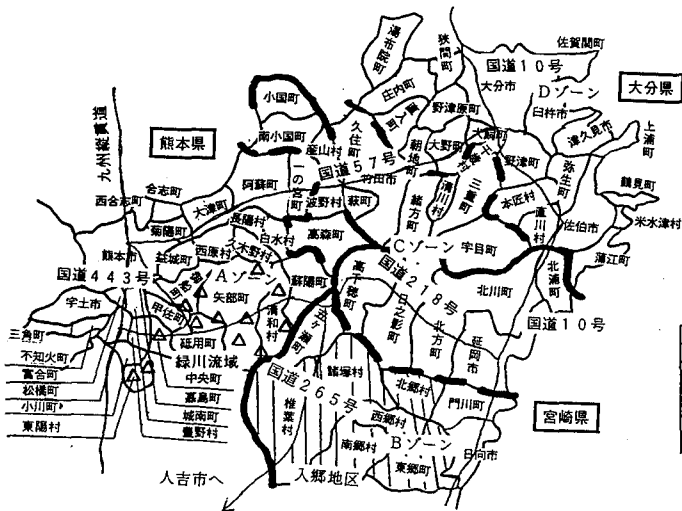
スタンプラリーによる調査概要を表-1に示す。

応募者の特徴及び観光客の流動特性を把握するために、単純集計を行えば、以下のとおりである。

主催地である熊本、大分、宮崎県内からの応募者が全体の68%と多く、主催地外からは、福岡県からの入り込み客数が全体の24%と多い。性別の割合は男性44.3%、女性55.7%で、若干女性の応募が多い。年代による差は比較的少ないが、若者の比率が若干多い。熊本市及び大分市の周辺自治体、宮崎県入郷地区、大分県南の海岸部の観光施設を訪れる観光客は少ない。日常生活行動と観光地の機能的重複や道路整備の遅れが原因と考えられる。

項目間の関係を把握することを目的に「項目Siと項目Sjとは関係がない」との帰無仮説を立て χ^2 検定による独立性の検討を行ったが、その結果は表-2に示すとおりである。このことから、広域観光連携の特徴を活かして、観光施設利用者の年齢構成を十分把握の上、年齢を絞った施策を展開する方法が考えられる。

各市町村間の特徴を把握するため、クロス集計を行った。その結果、福岡都市圏からの観光流動は、熊本市で国道218号と57号沿線の2つに分岐している。宮崎県北の入郷地区への流入は、道路整備が遅れていることにより少ない。福岡都市圏からの観光客は高速道路を使用して、小国町、久住町、湯布院へ流入している。これらの地域は、黒川温泉、杖立温泉、湯布院温泉といった温泉が観光魅力の一つになっている。高森町、宇目町、北川町、菊陽町、蘇陽町、久木野村、西原村、清和村、延岡市、日向



図－1 九州中央地域

市の観光施設は、温泉や壮大な景観をアピールしたことが、女性の趣向に合ったと考えられる。従って、女性をターゲットにしたイメージによる観光PRは有効な手法と考えられる。

(2) 観光流動の特性分類

観光流動特性を把握するために、数量化理論第3類を適用する。各軸の解釈とカテゴリースコアの分布を図－2に示す。

東九州側の観光流動は出発地と目的地が近接している。一方、西九州側は出発地と目的地が東九州に比べて分散している。これから、東九州側の市町村の観光流動は、比較的近接地の観光施設へ流動する傾向を示し、西九州側の市町村は遠距離の観光流動を示す傾向がある。すなわち、西九州側は高速道路の完成により、行動範囲が広がっており、東九州側は高速道路の整備が遅れているので、行動範囲が狭いことが明らかである。

(3) FSMによる階層構造

目的地観光客総数に占める各市町村からの観光客数の割合をもとに、観光流動の関係を把握するため、ファジー構造化モデルを用いて分析を行った。その結果を図－3に示す。福岡都市圏、熊本市、大分市、延岡市が観光流動の起点になっている。

4. 緑川流域の狭域観光連携

(1) 応募者の特徴

表－1 スンプラリーの調査概要

	九州中央地域	緑川流域
調査時期	H9.10.4～H9.12.7	H9.9.25～H10.1.31
応募者数	2,425	362
有効サンプル数	2,319	349
有効利用率	95.6%	96.4%

表－2 中秋中央地域の独立性の検討

	性別	年齢	Aゾーン	Bゾーン	Cゾーン	Dゾーン
性別	—					
年齢		—	**	**	**	**
Aゾーン			—	**	**	**
Bゾーン				—	**	**
Cゾーン					—	**
Dゾーン						—

[]: 関連なし [**]: 関連あり(有意差 0.01)
[*]: 関連あり(有意差 0.05)

調査概要を表－1に示す。緑川流域の観光客の流動特性を把握するために、各項目ごとに単純集計を行ったが、熊本県内の観光客が全体の81%を占め、また、県内でも、緑川流域内からの入り込み客が42%を占める。この地域の観光施設は、夫婦又は家族での利用がほとんどであることから、地域住民が余暇を過ごすための施設として利用されていると考えられる。また、入り込み客の訪問箇所数を比較すると、同一町村内の観光施設を複数訪れるより、他市町村の観光施設に行く割合が高い傾向がある。従って、観光施設が同一町村内に複数あっても、観光客はそこから、訪れる場所を限定して選択していると考えられる。

項目間の独立性の検定を行えば、表－3のとおりである。これから、観光施設同士には訪問地を左右する要因があることが分かる。

(2) 観光へ影響を与える要因分析

各市町村へ影響を与える要因を把握するため、表－4に示す起点から各町村の訪問の有無までの10アイテムを説明変量とし、各市町村の訪問の有無を外的基準として、数量化2類を用いて分析を行った。表－4に分析結果を示すが、本内容に基づく主な解釈は以下のとおりである。

清和村の観光施設は熊本市の中年をターゲットに、口コミを利用して観光PRした方が効果がある。矢部町の観光施設は新聞や雑誌で観光施設を知って訪れている。砥用町の観光施設は延岡市と砥用町の若

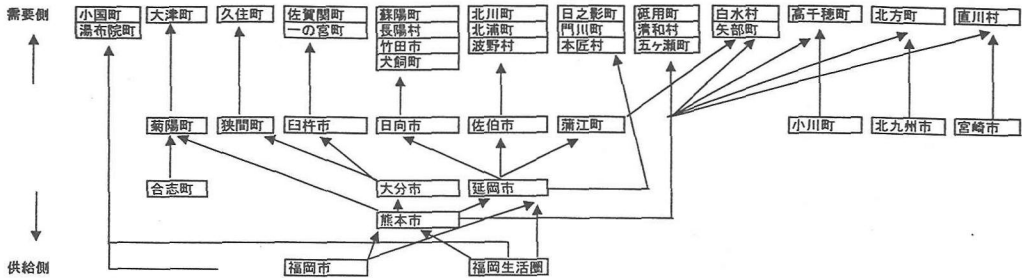


図-3 九州中央地域における観光流動図

表-3 緑川流域の独立性の検討

出発地	性別	年齢	きっかけ	清和村	矢部町	砥用町	甲佐町	御船町	中央町	東陽村
出発地	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
性別	0.081	—	—	—	—	—	—	—	—	—
年齢	0.186	0.133	—	—	—	—	—	—	—	—
きっかけ	0.266	0.105	0.119	—	—	—	—	—	—	—
清和村	0.339	0.019	0.117	0.207	—	—	—	—	—	—
矢部町	0.328	0.052	0.094	0.21	0.346	—	—	—	—	—
砥用町	0.459	0.015	0.131	0.222	0.422	0.34	—	—	—	—
甲佐町	0.347	0	0.116	0.076	0.034	0.137	0.093	—	—	—
御船町	0.342	0.125	0.176	0.13	0.062	0.178	0.100	0.500	—	—
中央町	0.324	0.08	0.163	0.155	0.338	0.244	0.481	0.107	0.058	—
東陽村	0.218	0.013	0.138	0.122	0.215	0.177	0.330	0.008	0.020	0.518

上段：独立性の検定表

下段：係数表

[] : 関連なし

[*] : 関連あり(有意差 0.05)

[**] : 関連あり(有意差 0.01)

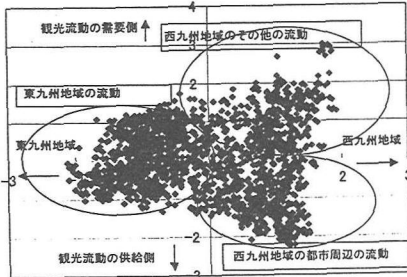


図-2 観光流動の特徴

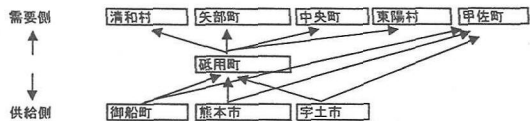


図-4 緑川流域における観光流動図

表-4 観光地へ影響を与える要因分析

アイテム	カテゴリー	cat.score	レンジ	偏相関係数	アイテム	カテゴリー	cat.score	レンジ	偏相関係数	アイテム	カテゴリー	cat.score	レンジ	偏相関係数
起点	熊本市	0.02	0.56	0.15	起点	熊本市	-0.08	1.95	0.3	起点	熊本市	0.10	1.95	0.26
	砥用町	-0.15				砥用町	0.87				砥用町	-0.19		
	御船町	-0.19				御船町	-0.62				御船町	0.98		
	甲佐町	-0.37				甲佐町	-0.41				甲佐町	0.19		
	矢部町	-0.19				矢部町	-0.67				矢部町	-0.49		
	延岡市	-0.29				延岡市	1.29				延岡市	-0.40		
	その他	0.19				その他	0.23				その他	-0.22		
性別	男性	-0.15	0.28	0.12	性別	男性	0.04	0.07	0.03	性別	男性	-0.02	0.04	0.01
	女性	0.13				女性	-0.03				女性	0.02		
年代	10歳未満	0.50	0.77	0.18	年代	10歳未満	0.17	0.68	0.18	年代	10歳未満	-0.12	0.82	0.18
	10代	0.12				10代	-0.23				10代	0.22		
	20代	-0.27				20代	0.45				20代	-0.52		
	30代	-0.01				30代	-0.02				30代	0.30		
	40代	-0.13				40代	-0.16				40代	0.14		
	50代	-0.20				50代	-0.06				50代	0.05		
	60代以上	0.12				60代以上	-0.01				60代以上	-0.24		
知った理由	雑誌・新聞	0.05	0.44	0.07	知った理由	雑誌・新聞	0.08	0.48	0.19	知った理由	雑誌・新聞	-0.03	0.49	0.06
	ラジオ	0.18				ラジオ	0.14				ラジオ	0.22		
	クチコミ	-0.02				クチコミ	-0.34				クチコミ	0.03		
	現地で	0.02				現地で	0.14				現地で	0.00		
	その他	-0.26				その他	-0.21				その他	-0.21		
清和村	防れない	-0.22	0.42	0.16	清和村	防れない	-0.33	0.63	0.26	清和村	防れない	0.07	0.13	0.04
	防れる	0.20				防れる	0.30				防れる	-0.06		
矢部町	防れない	-0.09	0.15	0.06	矢部町	防れない	-0.34	0.56	0.23	矢部町	防れない	0.07	0.12	0.04
	防れる	0.06				防れる	0.22				防れる	-0.05		
砥用町	防れない	-0.36	0.59	0.2	砥用町	防れない	-0.12	0.26	0.1	砥用町	防れない	-0.24	0.40	0.11
	防れる	0.23				防れる	0.14				防れる	0.16		
甲佐町	防れない	-0.14	0.30	0.11	御船町	防れない	-0.19	0.33	0.13	御船町	防れない	-0.84	0.46	0.33
	防れる	0.16				防れる	0.14				防れる	0.62		
御船町	防れない	-0.04	0.07	0.03	中央町	防れない	-0.23	0.53	0.19	中央町	防れない	-0.18	0.41	0.11
	防れる	0.03				防れる	0.30				防れる	0.23		
東陽村	防れない	-0.39	0.38	0.45	東陽村	防れない	-0.10	0.33	0.12	東陽村	防れない	0.08	0.28	0.08
	防れる	0.97				防れる	0.23				防れる	-0.20		
中央町	防れない	-0.58	相関比: 的中率	83.1%	砥用町	防れない	-0.86	相関比: 的中率	81.1%	甲佐町	防れない	-0.53	相関比: 的中率	76.2%
	防れる	0.75	0.44			防れる	0.55	0.48			防れる	0.63	0.34	

者をターゲットにして、観光 PR をした方が効果がある。甲佐町の観光施設は御船町をターゲットにして観光 PR をした方が効果がある。御船町の観光施設は甲佐町をターゲットにして観光 PR をした方が効果がある。中央町の観光施設は若者をターゲットにして観光 PR をした方が効果がある。東陽村の観光施設は中央町の観光施設との関係が強い。

結局、互いに隣接する市町村同士の住民の交流が中心の観光流動であることが明らかである。

(3) 観光流動の階層化

目的地観光客総数に占める各市町村からの観光客数の割合をもとに、観光流動の関係を把握するため、ファジー構造化モデルを用いて分析を行った。その結果を図-4に示す。

熊本市、宇土市、御船町が入り込み客の供給地となっている。砥用町の観光施設が交流拠点となる町であることがわかった。甲佐町は国道 218 号線と 443 号線との結節地であるため、多方向からの観光客の流動がある。

5. 広域及び狭域観光連携の比較と施策の提案

広域観光連携では、魅力のある地域に観光流動が集中しているが、都市周辺の地域には、十分な観光流動が生じていない。都市周辺の緑川流域を事例とした観光連携では、中心都市の熊本市や隣接市町村との観光流動がほとんどであり、広域的な入り込み流動は示していない。従って、熊本市と緑川流域の隣接町村間の住民の交流を中心にした観光施策の展開が考えられる。また、狭域連携では年齢と訪問地との間には関連がなかったが、広域連携では関連があることから、広域連携により年代に応じた観光魅力を提供できていることが分かる。

広域観光連携では、非日常的な体験を提供し、狭域連携では、日常的な体験を提供するなど互いに足りないところを補完し合うことが必要である。

以上の認識を踏まえながら、スタンプラリーの分析結果から、九州中央地域の観光連携推進における施策を提案する。

1) 宮崎県入郷地区の観光施策は、五ヶ瀬町から椎葉村へ至る国道 265 号を活用した観光ルートのご案内標識の充実を行い、椎葉村から人吉市へ抜ける観

光流動が可能な道路整備を行う。

2) 広域的な入り込みを示さない地域は、都市や隣接市町村との狭域観光連携を展開する。

6. 結論

本研究は、広域観光連携と狭域観光連携の観光流動の特徴を把握することで、具体的な連携施策の提案を試みた。観光連携は観光ルートの形成だけでなく、市町村間の入り込み客の流動連携を増大させる努力が必要であり、そうした点で研究成果を要約すれば、以下のとおりである。

1) 九州中央地域の観光流動は、国道 10 号、57 号、218 号を利用した循環型観光流動がある。福岡都市圏の観光客は、熊本市で国道 57 号線に沿った大分市方向への流動と国道 218 号に沿った延岡市方向への流動の 2 つに分かれている。また、福岡都市圏、熊本市、大分市、延岡市が観光流動の出発点となっている。さらに、東九州側の市町村の観光流動は、比較的近接地の観光施設へ流動する傾向を示し、西九州側の市町村は遠距離の観光流動を示すことから、観光連携の骨格もこうした流れを足掛かりに展開することが望ましい。

2) 狭域連携として緑川流域を取り上げたが、その観光 PR 方法は、道路沿の観光標識や口コミによる PR の方が効果があり、特に若い女性をターゲットにした雑誌による PR が効果的といえる。また、熊本市、宇土市、御船町が観光流動の出発点となっており、砥用町の観光施設が観光流動のキーとなる施設であることが分かる。

3) 画一的な観光施策ではなく、観光流動の特徴を踏まえた、東九州地域と西九州地域、都市周辺とそうでない地域の 4 タイプに分けて、観光施策を展開する。

参考文献

- 1) 田崎栄一郎：あいまい理論による社会システムの構造化、数理科学 No191, May, pp54-66, 1979
- 2) 九州中央地域連携推進協議会：九州中央 77 スタンプラリー, 1997
- 3) 緑川流域観光連絡協議会：緑川流域スタンプラリー, 1997